「堺・仙台文化交流」

堺・仙台友好の“象”徴 “トシコ“が築いた絆

仙台市八木山動物公園
元主幹兼飼育第一係長 大宮 優

昭和三十八年五月、当時仙台市公園課長だった鈴木光三氏が仙台市動物園（昭和三十二年十月二十五日開園）に来られ、大阪の堺市の水族館が昭和三十六年九月の第二室戸台風で被災して、併設していた動物園のインド象が一頭取り残されている。仙台で飼育してみないかと堺市の公園課長から依頼があったが、動物園としてはどうかとの事でした（後日談、鈴木氏と堺市の公園課長さんは大学の同窓生だったそうです）。当時、仙台市では大自然動物園構想が進行中で、我々としては願ったり叶ったりとお引受けすることにしました。動物園で象を受け入れる準備を整え、その年の十月十五日輸送用の檻を持参し、象を担当する相沢康哉氏と私二人で堺市の水族館跡地に赴きました。広々とした敷地に象舎だけがポツンと建っていました。前足と後足を繋留されている象（浜子）を見上げて、相沢氏は「大きいなあ・・」と言いました。翌日から早速調教に入りました。浜子は非常に性格がよく、見知らぬ私達にも良く馴れてくれました。二～三日で舎外運動や輸送用檻への出入りが出来る様になりました。仙台から当時の園長・井筒金造氏が迎えに堺市まで来られ、昭和三十八年十月二十一日いよいよ出発の日を迎えました。堺市役所で送別会に臨み市長さんから浜子の好物のバナナ・リンゴ・サツマイモを餞別に頂き、一路、仙台に向けて出発となりました。短期間で出発準備ができたのは当時浜子の飼育担当だった堺市の山野広光氏はじめ皆さんの適切な飼育管理のお蔭と今でも感謝しています。

仙台市役職前でのトシコ歓迎会（昭和38年10月23日）

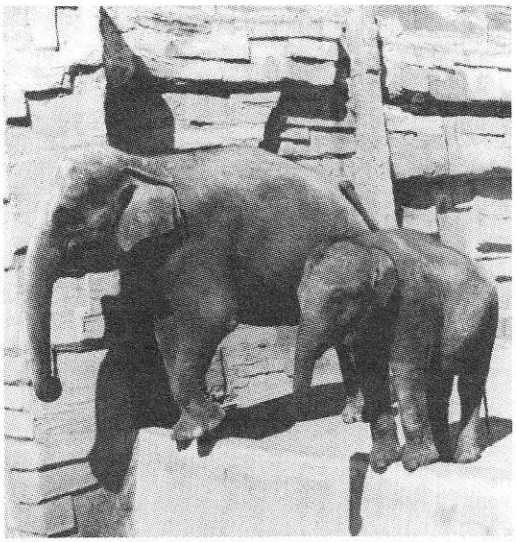
十月二十二日、夕刻、無事仙台に到着いたしました。翌二十三日に仙台市役所前広場で当時の島野武仙台市長を始め仙台市職員の方々の歓迎式に臨み、仙台市三居沢の仙台市動物園象舎に夕方五時頃に無事収容いたしました。当時、東北地方では初めての象でしたので、仙台市を初め宮城県、そして東北各県の小中学校の遠足が急増して十一月の来園者数は前年度の三倍強になりました。また「浜子」という名前は浜に近かった堺市にちなんだ名前で改めて来園の小中学生から名前を募集しました。十一月二十三日に島野市長が来園して命名式を行い「トシコ」に改名となりました。トシコは芸の習得が早く、昭和四十年十月に仙台市八木山動物公園に移動するまでの間に①お座り②逆立ち③ねんね（四脚をのばして横になる）④キンキン⑤千鳥足⑥カモメ足⑦乱杭渡り⑧碁盤乗り⑨唐傘廻し⑩ハーモニカ吹きを出来る様になりました。そして、新しい動物園では広々として象の運動場に遊具も整備され午前、午後の1回ずつ芸の時間にはトシコの周りにはたくさんの観客であふれていました。八木山動物公園随一の人気者となりました。

島野武市長が歓迎のバナナをプレゼント

昭和四十一年十一月にタイ生まれの仔象（ヨシコ）を購入し同居させたところ、まるで本当の母親の様に面倒を見てくれて、ヨシコを成長させてくれました。

昭和五十年四月に当時の文部省通達により動物虐待に値するという理由で動物園や水族館での動物芸は禁止となりました。トシコは今でも芸のねんねが忘れられないのか十時～十二時頃に昼寝をする様になり、若いヨシコがトシコの昼寝中そばに立って見守っている様なほほえましい光景も見られました。ところが残念ながら平成二十二年九月八日に若いヨシコが死亡してしまいました。春先から四肢の調子が悪く、亡くなる二ケ月前から屋外に出られなくなり、亡くなった日、横になったヨシコを担当者が何とか起こそうと努力しましたが午後五時に死亡が確認されたそうです。象担当の早坂氏の話では、一頭になってしまったトシコは寂しそうだったが食欲もあり、一見、元気に振舞っていましたが、日課だった昼寝の行動は見られなくなったそうです。

日本国内でのアジア（インド）象飼育頭数は六十四頭です。推定五十七才のトシコは東京井の頭動物公園の花子、大阪天王寺動物公園の春子、福岡市動物公園のおふくについで日本で四番目の長寿象となりました。



トシコとヨシコ（左：トシコ、右ヨシコ）